

令和2年度 第1回総合教育会議議事概要

令和2年12月18日（金）に令和2年度第1回総合教育会議が開催され、「これからの福知山市の教育」をテーマに意見交換が行われました。

第1回総合教育会議の議事概要は別添のとおりです。

令和2年度 第1回総合教育会議 議事概要

日時: 令和2年12月18日(金)
午後3時30分～5時30分
場所: 大江中学校

■出席者(敬称略)

教育長 端野 学
教育委員 塩見 佳扶子、和田 大顕、加藤由美、織田信夫
市長 大橋 一夫
事務局
市長公室長、経営戦略課長

■開会 大橋市長挨拶

端野教育長様をはじめ、教育委員の皆様には、日頃から本市の教育の充実発展に向けて、多大なご尽力をいただいておりますことにお礼申し上げます。

また、昨年度末からは、新型コロナウイルス感染症の拡大防止において、学校休業の対応や再開後の学校運営など、細心の注意をはらいながら、教育行政を進めていただいておりますことに、重ねて厚くお礼申し上げます。

先ほどまでの美鈴小学校の授業参観、大江小学校新校舎の施設見学は、たいへんお疲れさまでした。コロナ禍において、様々な行動制限や生活様式が変わる中でも、熱心に授業に取り組む子どもたちの姿に勇気をいただき、来年度からスタートする大江小中一貫教育校の開校に期待が膨らむところである。

この総合教育会議については、市と教育委員会が教育政策の方向性を共有し、一致してその執行にあたるために設置している。

今日の教育を取り巻く状況においては、新型コロナウイルス感染症という今まで経験のない環境の中で教育行政を進めていく必要がある。

また、近年急速に進む少子高齢化、人口減少といった課題や情報技術の進歩に伴う社会経済環境や価値観の変化、地球温暖化の影響による気候変動など、子どもたちをとりまく環境が大きく様変わりする中で、市と教育委員会が連携をさらに深め、「教育のまち 福知山」のさらなる発展に向けて取り組んでいく必要があると認識している。

本日の会議におきましては、「本市教育大綱の改訂について」の協議と「これからの福知山市の教育について」と題し、大きく変わりゆく時代の中で、子どもたちが必要な資質や能力を身につける教育を実現するために、本市の教育をどのように発展させていくべきか、これから必要とされる教育の取組などについて、意見交換をお願いしたい。

■協議事項

(1) 福知山市教育大綱の改訂について

大橋市長

現在の福知山市教育大綱については、計画期間を平成28年度から令和2年度までの5か

年とし、本年度が最終年度になっている。次の教育大綱の改訂に関して、事務局から説明する。

事務局

総合計画の延伸に伴い、教育大綱の改訂時期を令和3年度に延伸することを説明。

端野教育長

教育内容についてはたくさんの基準がある。教育大綱、国府との関係などがあるが、大元は学習指導要領であり、小学校は本年度、中学校は来年度から本格実施となる。そこに府・市の振興計画なり大綱があるが、これらはある一定期間の基準であり、それぞれに重点を策定している。今の時期は来年度の重点を検討していく時期となる。

福知山の将来像を考えるということで市民の皆さんの知恵を集めた総合計画が来年度末にできることにより、教育のあり方を考える時にずれが生じると大変困るわけである。そのため、内容の調整・検討がこれまで以上に重要になってくると思う。時代・社会が変わり、教育現場も変わる。例えば子どもたちのランドセルや黒板も必要かどうかを考えなければならなくなるほど変わっていくだろう。そういうことを背景にし、今後の教育をどうしていくのか。市長のお話の中にもあったように、検討すべきことは非常に多い。状況が変化する中で、基準を策定していく大変難しい時期になると思う。今、市長からあったお話では来年度末の時期に策定するということがあったが、来年度の4月からどうするかということについてはすでに作成している。今後の調整など課題はあるが、そのことを念頭に置いて対応していきたいと考えている。

大橋市長

今年、教育大綱を無理に改定してしまうと、どうしても総合計画との一致性も含め物事の考え方も難しいであろうと考えている。教育大綱だけでなく、他自治体の計画などでも、地方創生を含め、着手しかけている総合計画と一致した年度での策定を検討しているという状況がある。

ただ、総合計画ができないと大綱の策定に着手できないというものではないので、同時進行しながらしっかり連携し進めていきたいと思っている。言われたように、将来黒板がなくなるかもしれない時代を迎えており、教育だけの問題でなく、先がどうなるかわからない時代の中で策定していく話であるので、計画自体の重みが変わってきていると個人的には思っている。

これまで、PDCA とよく言ってきた。PLAN があり、それを前提として改善を図っていくためのサイクルではあるが、PLAN があって取り組んでいくのが本当にいいのか。時代や社会状況を観察しながら物事を考えていく方法を考えなければならないのではないか。PDCA と今の話は相反するものではないが、併存しながら取り組んでいく時代であり、PDCA が全てという時代ではない。そういうことを念頭におきながら、計画というものの位置づけも考え、しっかり連携を取りながら取り組んでいきたいと思う。

教育大綱の改訂について貴重な意見を受けたことを踏まえた上で、策定については令和3年度に延伸し、次期総合計画との連携、内容の充実を図るということで進めさせていただく。

(2)意見交換 テーマ「これからの福知山市の教育について」

大橋市長

本年度につきましては、これまで10年にわたって教育委員会で進めてこられた「市立学校教育改革推進プログラム」の最終年度であります。

また、シームレス学園構想の推進により、これまで進めてこられた学校再編の取組が令和3年度の大江地域の小中学校統合再編をもって、一定の節目を迎えることとなります。

これまでの学校再編の取り組みにあたりましては、各学校の保護者の皆様や地元地域住民の皆様のご理解とご協力を得ていただきながら、丁寧に統廃合を進めていただいたことに厚く御礼申し上げます。

また、新型コロナウイルス感染症の影響により「新しい生活様式」の定着が求められる中で、教育行政を取り巻く環境も大きく変化しております。

こうした状況の中で、これからの新しい福知山市の教育の方向性を定めていくための重要な時期と考えております。

そこで、まずは「これからの福知山市の教育について」、教育委員会よりその方向性などつきまして、お考えを頂戴したいと思います。

その後、何点かこれから必要とされる教育の取組につきまして、私の思いをお伝えしたいと思います。

端野教育長

これまでの振り返りとこれから目指すべきことについてお話ししたい。

まず振り返りとして、この10年間のプログラムのスタートはH20.2.5の学校教育審議会の設置により始まった。その中で学校教育のあり方に関すること、市立学校の環境の部分で適正規模・適正配置のあり方に関すること、この2点について審議会に諮問をし、翌H21.3月末に最終答申を得たところである。

それ以後、教育委員会は各地域・中学校ブロック・PTA・学校評議員等に説明を行った。いろんな意見、厳しい反応もいただいたが、H23.3にはシームレス学園構想・福知山市の保幼小中一貫連携教育推進計画が策定された。それまでに教育委員会事務局内では、教育総務課で学校適正規模配置・学校統廃合の問題、学校教育課ではシームレスの問題、生涯学習課では家族だんらんの日について検討し、教育のまちづくり推進事務局会議を設置する中でそれぞれの検討協議が進められてきた。最終的にはH23.6.14～H32の10年間の福知山市立学校教育改革推進プログラムが策定されて、今年度が最終年度となっている。福知山市の学校教育・社会教育、「教育のまち福知山」の看板をいかに支えていくか、という計画が進んできた。それまで福知山には「教育のまち福知山」という看板を掲げておきながら、教育目

標というものはなかったが、H24に策定し、その教育目標に「自分のため、人のため、社会のため」を掲げた。教育によって得られたものを自分だけではなく、人や社会のために使うという高い志を持った人間を育てるという目標を定めた。そういう風潮・土壌が市全体にみなぎっているということが教育のまちであるということで、その目標が策定された。

最終年度の現在、経過を振り返るとさまざまな意見があることと思う。一つは学校の適正規模配置で、学校統廃合という具体的な取組が10年間続いた。当時、小学校が27校、中学校が10校あった。現在、学校統廃合最終年度で大江地域の学校が統廃合して、来年度からは小学校が14校、中学校が9校になる。この狙いは、少子化の中で複式学級ができ、1人の担任がどちらも同時にみる形式では教育効果はマイナスである点から、適正な規模の学校を配置するために学校統廃合を行ってきた。結果、今の形の学校になったし、来年度からは複式学級は解消されることとなった。大きな成果として、一定の集団を保った学校ができあがった。そこにはスクールバスの運行や閉校による地域住民の思いなど様々な課題はあるが、子どもたちが勉強するための環境は整備できた。

もう一つは、不登校・問題行動が年々増えている。幼稚園・保育園から小学校へ入学する時の問題、小学校高学年から中学校入学時の心の問題など、こういった段差が大きく、不登校の増加などの課題が多くあった。学校間、学年間の接続をできるだけ段差のない、なめらかな接続を目指すため、一貫・連携した指導形態を作ろうということから保幼小中一貫・連携教育（シームレス学園構想）により福知山市の義務教育（幼児教育含む）の学習形態・指導形態を進めようとした。

当時現場にいたので、教育委員会からは取組実績を求められ、何ができたか不安を感じることもあった。振り返ると、「教育内容」、「指導方法」、「行事計画」、「研究内容」、「組織体制」、「子ども・教師の交流」、「教職員の兼務発令など人事の問題」、「専科指導や教科担任制の問題」など多くの点でシームレス学園構想の成果があったと考えている。

さらに大きな成果として、子どもの様子が変わった。今は中学生が本当によくなった。入学式、卒業式で子どもたちがしっかりと歌を歌う姿は本当に素晴らしい。教室も学習環境が非常に整った。子どもたちの活動もよく見え、教室も明るくなった。これらは小中一貫・連携の成果であると考えている。中々一気に変わることはないが、これは10年の大きな成果であると感じている。

一方で課題もたくさんある。最も深刻に思っていることは、課題の低年齢化である。問題行動・不登校も低年齢化が進んでいる。件数・人数の増加も深刻であるが、低年齢化が非常に深刻な問題であると思っている。先行きの見えない社会の中でどう対応していくかが課題である。

「響」プランでも触れているが、非認知能力が重要であると考え関心意欲態度、物や人を大切にしたり、美しいものを美しいと感じたり、表現したりチャレンジしたりする見えない学力のことである。どうすれば身につけることができるかということ是非常に難しいが、わかっていることは、非認知能力は子ども一人だけでは絶対に育たないということである。この力を育てるためには集団が必要である。子ども同士の学びあいがないとその力は育たない。これをどのように育てていくのかが大きなテーマであり、「響」プランの中の一つのテ

ーマであると思っている。

また、新たな課題としては4点ある。1つは教育指導の理念を確立するということ、2つ目は指導者の育成、これには指導者を育てるための指導者を育てることが重要である。3つ目には、よい環境を作るということ。これは、施設設備もそうだが、よい教員も含む。そして4つ目は、様々な変化にどう対応していくか、ということである。そんな中で、自分の頭で考える人材を育てていかなければならない。そのためには問題、課題を発見し、乗り越えられる人間を育てていかなければならないと思っている。

社会の様々な変化に応じた設備等、対応していくには膨大な予算が必要となる。今の子どもたちは20、30年後に福知山を支える人間であるので、今育てることが将来の投資となるため、そう考えれば教育費というものは政策予算的なものであると思っている。来年度からは新たなスタートを切ることになるので、これからもよろしくお願ひしたい。

大橋市長

それでは、これから必要とされる教育の取組みについて、何点か思いをお伝えしたいと思う。その後意見交換とさせていただく。

一点目は、教育長からもあったように、時代の変化が激しい中で、プログラミング教育も開始し、GIGA スクールも来年の4月スタートできるよう準備を進めている。これから求められる教育にデジタルの分野は欠かせないと考えている。Society5.0 を含めた人材育成がベースにあると思う。コロナ禍の中で想定より早く進んだということもあるが、GIGA スクールも含め、そういうことが始まるなかで子どもたちの個性を活かしたアクティブラーニングが求められていくと思う。こうした点は教育長からもあった、黒板がなくなる時代にもつながっているのではないか。一斉授業というかたちが変わってくるかもしれないし、ある面では手厚かった授業かもしれないが、子どもたちが受け身であったということもあるかもしれない。これらを進めることにより都市部と地方の教育格差の問題などが少し解消されてくるだろうし、教員の皆さんの負担が変わってくるであろうと思っている。

そこでどうしても STEAM 化¹の話は欠かせないように思う。想像力を持ち、自立化したような個別最適化されたような教育というのが受けられるようになっていくべきだと思う。全体として進めていく上で、EdTech²としての教育を多方面から考えなければならぬと思っている。GIGA スクールに関しては公立大と連携して進めていただいているので、分析し、フィードバックするには時間を要するかもしれないが、これが定着してくると、若い教師の指導に関しても、負担の面に関してもプラスの効果を発揮するのではないかと思う。ひいては子どもたちにも還元されると思っているので、しっかり進めていただきたいし、市としても進めていきたいと思っている。

¹ Science、Technology、Engineering、Art、Mathematics の頭文字を組み合わせた造語。科学的、数学的な基礎を育成しながら、批判的に考え、技術や工学を応用し、想像的・創造的なアプローチで課題に取り組むように指導を行う。

² 教育(Education)とテクノロジー(Technology)を掛け合わせた造語。AI、IoT、VR等のテクノロジーを活用した革新的な能力開発技法。

その中で学校外の教育として、公立大で小・中学校の希望者にプログラミング教室を実施した。小学校は希望が多く、冬休みにも開催を予定している。深く学びたいという子どもたちの個性に応じて興味を持てる学びを提供するという点で公立大としっかり取り組んでいきたいと思っている。

二点目は、ふるさと教育という視点かと思うが、キャリア観の育成も必要と思っている。杉本シェフが考案したメニューも一緒に食べたが、食育やキャリア教育ということは今後も進めていきたいと思う。市外で活躍されている方だけでなく、市内でキャリアを磨いていただいた方にも話を聞く機会があればと思う。公立大の教授にも協力いただき、市内で活躍されている方々に子どもたちが接することにより自分たちの将来を想像するヒントになればと思っている。

先ほど教育長からフリースクールも含めた不登校の話の中で、数が増えていること以外に低年齢化していることが非常に不安だという話があった。これについては、けやき広場で懸命に取り組んでいただいているが、そこだけでは対応しきれない部分もあると思っているので、フリースクールの設置が必要であろうと考えている。教育委員会・子ども政策室と一緒に頑張ってください、令和3年度からは専門職を配置し、取組を進めていきたいと思っている。あわせて防災教育についても、子どもたちの自立性は防災という分野にあらわれてくるので、さらに進めていきたいと思っている。

もう一つは、現状ではコロナ禍で海外へ行くことは難しいが、どれだけデジタル社会になったとしても海外との接点は不可欠である。中学生に短期の海外留学を経験してもらいたいと、支援制度の相談をさせていただいた。コロナ禍ということでR3から始められる状況ではないが、R4にはなんとか始めさせていただきたい。中学生が具体的に留学で何かを学んでくるということは難しいと思っているが、将来、海外に目を向ける端緒になるのではないかと考えているし、中学時代から違う文化を含め体験してみるということは必要なことと思っているので、そういうことを将来に向けて進めさせていただきたいと思っている。

また、環境問題についても子どもたちに考えてもらいたいので、小冊子を配布させてもらった。彼らが生きる時代は今より自然環境が悪くなっているかもしれない。今のままでは、そんな時代を彼らは生き抜いていけないといけないと思っている。

SDGsの観点からも、環境問題というのは未来に対しての我々の責任の問題でもあると思っている。基礎自治体で、市としてできることはわずかかもしれないが、子どもたちにも知ってもらいたいという思いで冊子を作らせていただいた。この問題は人によって大きな意識の差があると思う。スウェーデンのグretaさんは15歳で環境運動を始めた。環境問題は子どもたちに伝え、我々も取り組んでいかなければならないことだと思っている。

学校の体育館の照明のLED化も開始した。学校施設については今年の4月から電力を再生可能エネルギー由来の電力に切り替えた。そういうところを含め、市としての姿勢を子どもたちに伝え、子どもたちにも考えてもらうきっかけ作りになれば、と思っている。

私からは以上になります。それでは、委員のみなさまよりご意見をいただきたいと思う。

塩見委員

福知山が大好きである。生活環境が整い安心して住むことができる。子ども政策室があり、妊娠から就学前までを一元化した施策があり、大変安心して子育てができる。市長の7つのまちづくりの中で、質の高い子育て、学びのまちが掲げられており、一人一台のタブレット、中学生の短期海外留学、公立幼稚園・保育園のこども園化などの施策を推進していただいている。子ども子育て支援事業により、子育てしやすいまちになっていることが、合計特殊出生率(2.02)にも表れているのではないかと考えている。

そのような中で、就学後の小中学生についてはどうか考えたい。希望する進路実現に向け、確かな学力を身につけ、技術革新の進む時代をたくましく生き抜く力が大切となる。学校教育の果たす役割は大きく、地域社会の皆様も期待も大きい。学校は、誰一人取り残すことのないように教育内容のさらなる充実を目指し取り組んでいるが、経済格差が学力格差とも言われ、家庭環境が学力にも影響すると言われている。さらに今年はコロナ禍により、社会情勢は厳しい状況となった。危機感を感じ、これまで以上に子どもの学習に関心を示す家庭や、就業状況が厳しくなり生活が圧迫されて子どもへ目を向けることが不十分になっている家庭があることが現状だと思う。実際、コロナ禍での学校休業の間には、家庭の状況により学習への取組に差が出たと思う。福知山の子どもの貧困率は6人に1人。子どもがいる貧困世帯の半数以上がひとり親世帯。それらの子どもが置かれている状況を支援するためには、ライフステージの進行に合わせて様々な関係機関による多面的な関わりが重要であると思う。学校や行政などは困難を抱えた子どもの自己実現に向けて学力への支援・生活力への支援・養育への支援など様々な取組が体系的になされている。一つの取組として地域みらい塾がある。放課後児童クラブもあるが、今年は地域みらい塾をさらに拡充していただきたいと思っている。これが福知山教育の進展につながると考えている。全中学校区で開始して3年目になる。成果として、1つは地域の人と学校の連携が増えた。2つ目は、地域の人は生徒の学力充実を図るだけでなくここにも寄り添って、子どもたちはそこの時間をほっこりする、また来たいと思える時間を過ごさせていただいている。3つ目は地域の人でも子どもから元気をもらい、地域の子は地域の人々で育てるという意欲につながっている。今年はこの地域みらい塾を小学校にも広げてほしい。それには先ほどの中学校での成果に加えて理由がいくつかある。中学校では進路実現が目の前の課題となるが、小学校では基礎的事項の習得・定着が重要となる。発達の早い段階で適切な指導ができれば学習の習得がよりスムーズになると思う。中学生でもほっこりする居場所であるので、小学校ならなおさらと考える。地域の人々に温かく見守られ心を満たされれば、明日への学習意欲につながるのではないかと思う。

小学校では今年度から外国語が高学年で教科となった。他学年では外国語活動や国際理解教育をしてグローバルの世界に目を向けている。外国語はグローバル化した世界でコミュニケーションをはかる一つの手段として重要視されている。しかし家庭の事情により塾に通ったり、市販教材による学習をしたりして、学校外で慣れ親しんでいる児童が増えつつある。プログラミング教育も導入され、ICT機器を駆使して学びを深め、広げることも取

り組んでいる。学校では1人1台タブレットを持って学習するが、どの家庭にもあるとは限らない。家庭の事情により教育環境が整わない児童に、地域みらい塾で小学校の時期から学習の機会を提供いただければと思う。子どもは将来を担う社会の宝である。全ての子どもが生まれた環境に左右されることなく、その将来に夢や希望を持って育つことができるよう、学校・家庭・社会・行政が連携して実現できることをたくさん進めていただきたい。

大橋市長

経済格差が学力格差につながるという調査結果には非常にショックを受けたところである。貧困の連鎖というものを断ち切らなければならない。

地域みらい塾を小学校に拡大した場合の課題や、どういう中身で拡大していくのかなど検討していきたいと思う。例えば子ども食堂は、子どもだけの食堂にしてはダメと言っている。地域の人と一緒にした食堂にしなければならないという話をしてくれている。同様の考えで地域みらい塾についても考えたいと思う。

和田委員

10年ほど前から「いわゆる教育予算」という表現がされるようになったかと思う。それと同時に、義務教育学校の児童・生徒の教育内容の予算は横ばいになった。近年はプログラミング教育・防災教育・ICTを活用したラーニングイノベーションプロジェクトなど次々福知山ならではの教育推進に新しい視点で予算化していただいて「教育のまち 福知山」を再構築していただくことを感謝し、期待をしている。

プログラミング教育は予想しがたい問題を、プログラミング的思考力をもって解決していく能力の育成を目指すものであるが、このプログラミングを実施することで、他の授業へ向かう態度にも積極性が表れてきた児童が出てきたことは、プログラミング教育が生み出した副成果、副効果であると思っている。

本日は、学校が目指す防災教育の目標に合わせ、子どもの自己肯定感を高め、市民の防災意識を一層高める副成果、副効果が得られる、双方に効果が求められる防災教育になることを願い意見を述べたいと思う。

以前より、災害に対応する能力の基本を養うことを目指して関連する教科や総合的な学習の時間、特別活動などで発達段階に応じて防災教育を行ってきた。その中、市長より学校での防災教育の重要性の考えを受けて積極的に取組を始めて2年目になると思う。文科省が示す防災教育の様々な起点から児童の安全を確保するために行われる安全教育の一部を成すもので、防災教育のねらいは生きる力を育むこととしている。それに併せ、自然災害が多い我が国では、災害後の生活復旧や復興を支えるための支援者としての視点も重要視される。互いを高めあうとともに、良好な社会づくりに主体的かつ積極的に参加・参画していく手段としても防災教育は期待される場所である。最近、子ども達の自己肯定感の低さが問題視されている。中央教育審議会では子どもたちの生活意識調査を取り上げて、子どもの自己肯定感の低さを我が国の危機と紹介している。一方、全国各地の被災されていない成人

の方々には防災意識が広がらない状況だとも聞いている。

防災関係者から安全性バイアスという言葉を目にした。自分は災害に遭わない、万が一災害に遭っても自分は助かるという根拠のない安心感を意味する言葉だという。この安全性バイアスがあることから危機感が薄れ、防災意識が広がらないという指摘もある。もし本市にもその傾向があるなら、防災教育を進めることで子どもの自尊心を高め、自己肯定感を高めるとともに、市民の一層の防災意識の向上を図ることが同時にできるのではないかと考えている。

子どもたちは災害が起きないことを願いつつ、万が一を想定して、我がまち福知山を知ることから始める。自然・環境・人々の暮らし・課題を学び、その解決を目指して知識・技能を使い、友達と相談して、親・地域の人の意見に耳を傾けながら表現していく。11月5日の両丹新聞に災害時の自助共助の重要性を学校の防災教育で学んだとの記事があった。子どもたちが一生懸命取り組み、命を守るための学習や成果・アイデアを市民に発信していくことは、市民が子どもたちのことを頼りになる存在と認知し、頼りにされることが子どもたちの自己肯定感を高めることに繋がっていく。その姿を見ることは、家族はもちろん、市民の防災意識を高めることになると考えている。子どもたちが地域の中で防災活動というキーワードで、役割を持って活動する姿は疑うことなく市民の防災意識を高めます。学校予算として配分していただいた防災教育への予算は市民への防災啓発予算にもなるのではないかと思う。学校の防災教育を市民に知っていただく機会を創出していただきたい。それは子どもたちの問題解決にもつながっていく、ということを考えて提案したい。

大橋市長

防災教育への話をし始めたのは、東日本大震災の釜石の奇跡の話を受けたところがある。あの時、2人亡くなられたと思うが、学校へ行っていた子どもたちは大丈夫だった。1人は体調が悪く、自分は逃げられたが隣家の高齢者を助けようとしたため亡くなったと記憶している。子どもが自分で判断し、自分の命を守る。釜石では中学生は自分の命を守るだけでなく、できるのであれば自分より小さい子や高齢者の命を守ることを教わっているとのことであった。災害があると、親は心配で学校へ迎えに行ってしまうが、「うちの子どもは必ず逃げる」と親が確信を持てれば、親は自分の身を守るために逃げることができる。迎えに行くことで亡くなる親もたくさんあった。そういう時に、子どもは子どもで判断して逃げる、だから親も逃げようというかたちにしていくべきだろうということ、当時釜石で防災教育に取り組んでおられた片田先生はおっしゃっておられた。そういう行動が徹底されれば、子どもの生きる力という点で自己判断や自分の命をしっかり守り、さらに他人も助けるということで自己肯定感にもつながっていくかと思う。

片田先生に、福知山は水害の多いまちであり、市民は経験があることで、自分で避難の判断をしてしまうという話をした時に、経験を持っている人たちの意識を変えるのは大変だと言われた。だから子どもたちから意識を変えていかないと無理だと先生に言われた。そういうことも含め、子どもたちが防災のけん引役になってくれるのかなという思いもあり、防災教育を申し上げたつもりである。和田委員から言われたように、さらに防災教育を進めて

いただきたいし、市長部局としてもできることはやらせていただきたいと思う。

加藤委員

八幡、宇治を経て福知山に戻った時、市の教育環境に安心できた。

先輩たちが若い教師につないでいく体制を作っていることを実感できた。大きく変わっていく社会であると思うが、引き継ぎ受け継がれるものは大事にしたいと感じる。

美鈴小を見た後、大江の新校舎を見て、時代は変わるし、変わっていかなければならないと感じたところである。

適正規模・適正配置と言われてから10年が経つ。来年度から大江は複式学級が解消されるということに、大変感慨深いものを感じる。

また、来年中学校から学習指導要領の改訂が始まる。指導要領の中に学力という言葉が使われなくなっている。生涯にわたって身につけるものの資質・能力が使われるようになっていく。理解していること、できることをどう使えるのかという資質・能力が求められるという方向性が具体化されたことが今回の改訂の大きな点であると思う。学んだことが自分にとってどう役に立つのか、その意義が実感できるような学習活動が重要になっていくと思う。その点は、本市が推進しようとしているICT教育やプログラミング教育・防災教育等は体験型・参加型が主になってくるので、資質能力の重要な切り口になってくるのではと大きく期待するところである。ただ、現場に長くいた経験から、新たな取組を導入する際の課題や配慮すべきことを考えておく必要があると思う。近年、外国語教育・道徳の強化に伴い学校現場は大変時間数が増加し煩雑化する中、新たな枠でICT教育等を盛り込むことは大変難しいと思っている。教育課程の総合的なことを見直していくこと、新たなことを関連付けて考えられる教師の育成が重要であると思っている。市街地の学校では教師の平均年齢が30歳くらいとなっている。教育機器の利用ができる教師は多いと思うが、扱えることと関連づけながら授業を構成していく授業力は比例しないことが多々あるように感じている。

本市で大事にしてきた指導の伝承というものが急に変わってきた中で、文化の衰退というものに危機感を感じている。授業力というものは一言では言えないが、一斉の授業というよりは個々を見る力であったり、授業のポイントを伝える力、生徒指導など、総合的にとらえられて初めて授業というものになるのだと考えれば、基本的な授業力の危うさの中で新たな取組を進めることは難しいと感じたりもする。教師の人材育成を、組織的・意図的に進めることも急務ではないかと思う。人は増やしていけるが、個々の現場でその人材をどう活用していくかは、現場のリーダーである校長先生はじめ、創意工夫する力も改善されているように見えて難しさもあるように感じたりもしている。そのあたりの体制も組織的に作り基盤を整え、その上に新たなものが関連づけながら乗っていくことが効果的ではないかと思っている。

2点目は生きる力の育成・資質能力の育成・ICT教育、防災教育等の必要性の関連や意義を学校現場に浸透させていくことが必要である。先生方の温度差や学校間の違い、環境の違いもあるので、それも考慮しながら浸透させることが大事である。関連性を理解しないと機器の扱いや技術に翻弄されて、活動あって学びがない取組にならないかと心配を持つ。若い

教師は個人的に研鑽を積んでいるが、縦横のつながりの希薄化を懸念する。このような時代だからこそチームで取り組める体制づくりが大事であると思う。

最後に、様々な学校施設の話聞いたが、市街地では老朽化しているところもまだあるように思う。そのような劣悪な環境を整備していきながら、明るく清潔な環境にしていくことが子どもたちを育てる一番の根になるではと思っている。これからの時代に求められる資質能力の育成の一環としての ICT 教育・防災教育等を推し進めつつ、それらを取り入れる組織・人・授業・環境整備等といった土壌整備を意識的にバランスよく進めていくことの必要性を感じている。

大橋市長

引き継がれてきたものを次世代につなぐということは、実は非常に難しいことだと思う。ジェネレーションギャップなどもあるように思う。

また、使えるものは使うという考え方もあるかと思う。ラーニングアナリティクスの取組で、有効とされた取組を積極的に使っていくことも早く次世代を育てていく方法なのではと思うが、それが全てではないので、教師を指導する教師をどう育てるかという話もあったように、そういうことも考えてやっていただかなければならないと思っている。

市街地の学校の改修も認識しているので、優先順位を検討しながら対応していきたいと思う。お話をうかがい、後進の指導という面で大変ご苦労され、心配されていることがよくわかった。引き続き、お願いしたい。

織田委員

人生の半分を福知山で過ごしている。教育の専門家ではない中で教育委員を拝命いただいた。

これまで、1人の保護者という立場で教育現場を拝見していたが、企業経営者という視点で見ると会社は地元志向、地元の若い人を採用したいと思っていることから、今からの小・中学校での教育のあり方をどうすべきか、そういう切り口で考えてみたい。

プログラミング教育について、公立大との連携による小中学生への学びの機会は非常にありがたいと思う。一方で、保護者の立場からはプログラミング教育って何なのか、という思いを持っている人が非常に多いと思う。プログラミング志向でいろんな教科に応用していくという考え方も非常に参考になる。PDCA という話もあったが、子どもたちに計画させ、体験をし、何が良く、悪いのかをチェックさせ、そして次へアクションを起こしていくということを、教育の中で柱立ててやっていかなければならない。そのためには、子どもたちが成果を発表できるようなイベント等の場を設け、なおかつ結果が良ければ評価してあげるということも必要ではないかと思う。一人の力ではできない。

昨年、所属する他府県のロータリークラブでスペースロボットコンテストを実施した。そこは小・中・高校のそれぞれの部というかたちで開催され、文科省・総務省からの支援、JAXA、各メディアからの支援があり、予算的・人的・会場的にも開催ができた。福知山市だけでやろうと思うと困難であるので、そういった関係機関と相談しながら、まず一つやってみると

いう努力が必要ではないかと思う。やってみる中では、個人個人でやるのではなく、子どもの教育ということでいけばチームを組んで実行してみることも必要ではないかと思う。

また、異なる切り口になるが、オーストラリア出身の英会話教室の話聞いた。その先生は日本の義務教育に否定的であるようだが、子どもを集めて英会話を行う中で言われたのが、日本の英語教育は学校で文法の詰め込みで教えられて、結果として英語が嫌いになるという話であった。

その英会話教室では多国籍の方が講師となって、異文化交流の場となっている。英会話の中で、状況を読み取る能力を養う必要があり、状況を理解する力が必要である。さらに答えを考え、そしてそれを言葉にして表現することが必要となる。単語・文法の教育はされるだろうが、それに何かテーマを与えて自分の言葉で話ができる、表現ができるころまで、簡単な方法を用いてやっていくべきではないか。そこの英会話教室では、いろんなモノづくりを体験させている。例えば、ケーキを作るとして、材料とレシピを提供するが、それらはすべて英語で書いてある。子どもたちはそれを読み解きながら作り始める。講師は、安全面は監視しなければならないが、数人のチームで行う過程はすべて子どもたちで考えさせる。そして出来上がったものを食して、できてよかったとなる。そういった実行できたこと、出来上がったものに対する評価、というものを自ら提案するというような体験をさせていくことになるほどと思った。今の福知山の学校教育の現場でできるかは、非常に課題は多いかと思う。

若い子が大人になってから企業人材として輩出できる教育をつくっていかなければならないし、企業人としてはそういう若い子を採用していきたいと考えている。私も、福知山市内の公立高校・私立高校・公立大学の就職担当の方と意見交換することがあった。公立大の学生2人と面接をした。ずっと福知山で学び、福知山で働きたいという2人に共通する点は、非常に頭が良いがしゃべれないという欠点があった。素晴らしい教育をするのは良いのだが、発言する・表現する機会を設けられるような方策が必要である。学校教育なのか、市独自でその場を設けるのかは検討しなければならないが、当然、学ぶ力は育て、さらに可能性を伸ばすではなく可能性を引き出すための表現力を養う教育というのも必要だと思う。

とりとめもない提案であるが、答えがあるものはスマホ等で検索すればでてくる一方で、答えの見えない時代になってきているので、あえて答えの出ない課題をあたえて、それを考えながら自分の言葉で表すという教育の手法も必要なのではと思う。

大橋市長

スペースロボットコンテストなどは非常に具体的でいい話であるように感じた。子どもが意欲的に取り組み、グループで一緒に頑張るというプロセス自体が子どもにとって非常によい教育のかたちであると思う。さらにプログラムによりロボットが動く操作も学べるということは、面白いという語弊があるかもしれないが、検討したいと思う。このあたりは教育委員会の協力が必要になるので、相談させていただければと思う。小中学生がどのくらいのことでやるのが相当なのかは検討していく。

可能性を伸ばすのではなく、引き出すというのはその通りであると思っている。せっかく

持っているものを出せないというのは、周りから見れば自分の未来を拓く可能性自体を潰してしまっていることになる。どうすれば自身の能力をしっかりと発揮できるかということは大変なことであると思う。

大橋市長

それでは、本日予定しておりました総合教育会議の議事については以上となりますが、引き続き理事者同士の協議や市長部局と教育委員会事務局相互が連携を密にし、教育行政の推進に対応していきたいと考えています。

■閉会 端野教育長挨拶

本日は遅くまでありがとうございました。

不登校は非常に大きな課題であると認識している。小、中学生がその時期を休んでしまうと、その青春時代の貴重な時間は生涯かけても取り戻すことはできないことであり、大きな問題である。学習は取り戻すことができるが、その時間は戻ってこない。何とか防げないか、全力で取り組んでいきたい。

防災教育も話があった。災害に遭い、まず自分の命を守るためだけに行動することは、私はそれでいいと思っている。みんなが自分の命を守る防災教育が徹底できていれば、多くの命が守られることになる。今の子どもたちに防災教育を徹底すること、まずは自分の命を守るために逃げる、それが防災教育の成果であると思っている。そのプログラムをいかに組むかがテーマであると思う。

先が見えない時代に大事なことは、学習指導要領では、主体的で対話的で深い学びとある。わからないのは「深い学び」である。思うに、常に問を持ち続けることだと思っている。それが深い学びにつながるとしている。

今日の様々な話の中で、これからの時代をいかに生きていくかという話があった。流行もあれば不易もあり、教育を進めていく中で、それらをしっかりと見極めることも重要であると思う。

「ひとづくりはまちづくり、まちづくりはひとづくりによる。その基本は教育の現場にある。」と考えている。まちづくりを進める市長をはじめ、関係者の方に教育現場のことを振り返っていただき、相談・ご助言等お願いしたいと思う。

以上